

鬼貫『東海道旅日記』と芭蕉

復本一巻郎

平成八年（一九九七）、芭蕉自筆本の『おくのほそ道』が出現し、人々の耳目を集めた。芭蕉が『おくのほそ道』を俳句を嗜む書家の素龍に清書してもらったのは、元祿七年（一六九四）初夏（陰暦四月）のことである。芭蕉は、これを『おくのほそ道』の定本として「隨身」（携帶）していたという。この本を「模写」して、書肆（出版社）井筒屋庄兵衛が出版したのが、元祿十二年（一六九九）、あるいは十五年（一七〇二）と言われている。この段階から『おくのほそ道』は、多くの不特定多数の読者に愛読されるようになったわけである。それゆえ、出現した芭蕉自筆本の『おくのほそ道』は、いわば、芭蕉の創作ノートのような位置を占めるものと考えていただければよい。七十数箇所の訂正箇所が、そのことを如実に語っているようにし、素龍清書本の『おくのほそ道』との本文の異同も少なくない。芭蕉の創作工房の秘密をかい間見ることができるわけであり、その意味で出現の意義は、すこぶる大きかったのである。

その『おくのほそ道』の旅を芭蕉が試み、江戸を出立したのは、元祿二年（一六八九）三月、芭蕉四十六歳のことであった。そして、素龍が、完成稿の『おくのほそ道』を清書したのが、先に記したように、元祿七年四月のことである。その間、いつの時点で、今日の素龍清書本の『おくのほそ道』の原型のようなものが出来上がったのか、諸説あるが、実際のところは、定かでない。が、旅の体験をもとにして、一篇の紀行文学を創作しようとの意図は、旅を企画した当初から持っていたように思われる。

そんなことを想像させるのが、芭蕉と同時代の俳人鬼貫の著した「禁足之旅記」、すなわち、私呼ぶところの『東海道旅日記』なのである（拙著『本質論としての近世俳論の研究』風間書房、昭和六十二年四月刊、参照）。鬼貫が、『東海道旅日記』を執筆したのは、元祿三年（一六九〇）十月のことである。時に、鬼貫、三十歳。芭蕉より十七歳年少ということになる。そして、すぐさ

ま出版した。出版書肆は、井筒屋庄兵衛、書名は『犬居士』としての出版である。『犬居士』の奥付は、「元禄三^{庚午}十月日」となっているが、当時の出版目録である阿誰^{あずい}軒^{けん}編集の『俳諧書籍目録』（井筒屋庄兵衛刊）を繙くと、元禄三年「十二月朔日」の出版となっている。こちらが実際に出版された日付であろう。それにしても、十月（恐らく上旬）に執筆して、十二月一日の出版であるから、約一ヶ月半という超スピードで出版にこぎつけたということである。鬼貫の頭の中には、前年の元禄二年九月に大垣で旅を終えている芭蕉の『おくのほそ道』の旅があったのではないかと思われるのである。鬼貫情報網の中に芭蕉が新趣向の紀行文学『おくのほそ道』を執筆、出版するとの情報が入り込んでいたのではなからうか。それが、忽卒の間に鬼貫をして、紀行文学の執筆、出版を促したように思われるのである。

*

鬼貫は、元禄三年（一六九〇）八月三十日、居を大坂市中より郊外の福島に移して、自らを「犬居士」と号している。号の由来は、「誹道^{はいだう}をほゆ」、すなわち鬼貫流の俳諧^{はいかい}ハ伊丹風^{いたんふう}を喧伝^{けんでん}する自らを卑下し、諺^{ことわざ}「犬の逃げ吠え」に準^{なぞ}えてのものであった。

そして、移住記念に出版したのが、「禁足之旅記」、すなわち『東海道旅日記』を主内容とする『犬居士』で

あった。『東海道旅日記』の中には、「誹道をほゆ」との号「犬居士」をそのまま書名とした、その姿勢のごとく、ハ伊丹風^{いたんふう}の俳諧観^{はいかいかん}が、一部披露されているのである。

『東海道旅日記』は、元禄三年十月二十日の大坂から伏見への船旅ではじまるが、『犬居士』は、その前の八月三十日の福島移住から、九月十五日までの出来事が、句日記形式で記され、その九月十五日の条には、友人の餞別句三句が紹介され、そして、「禁足之旅記」へと繋がるという仕掛になっているのである。すなわち、句日記部分は、『東海道旅日記』の序文としての役割りを負うべく計算されて置かれているのである。

*

そこで、鬼貫に紀行文学『東海道旅日記』の執筆、出版を促したであろう芭蕉の存在の大きさを、『東海道旅日記』そのものを通して探ってみることにしたい。

ずばり、芭蕉の名前が登場する条がある。出立二日目の九月二十一日の条である。必要箇所を摘記してみる。

この所（筆者注・兼平塚）より道を右にのぼりて、石山のいしの形もや秋の月

もどりに芭蕉がいほりにたづねて、

我レに喰せ椎の木もあり夏木立

まず、「芭蕉がいほり」から問題にしたい。膳所^{ぜぜ}の義

仲塚から兼平塚へと歩を進め、さらに石山寺へ登り、その帰途に立寄った「芭蕉がいほり」とは、芭蕉が『おくのほそ道』の旅後の元禄三年（一六九〇）四月六日より七月二十三日までを過した国分山の「幻住庵」にほかないのである。

芭蕉が、その折のことを記した俳文「幻住庵記」（『猿蓑』所収）は、

石山の奥、岩間のうしろに山有、国分山と云。（中略）住捨し草の戸有。よもぎ、根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年計むかしに成て、正に幻住老人の名をのみ残せり。

と書きはじめられ、

先たのむ椎の木も有夏木立

の芭蕉句で終っている。これによって、鬼貫の言う「芭蕉がいほり」が「幻住庵」であることが確認し得よう。しかも、へ我レに喰せし鬼貫の一句が、芭蕉句を踏まえたものであることを知り得るのである。

鬼貫が「幻住庵」を訪れたのは（『東海道旅日記』は、空想の旅、心の旅、ということになっているが、近間は、実際に足を運んだ可能性もある）元禄三年十月二十一日であるので、芭蕉が出庵してから、まだ八十六日しか経っ

ていないのである。鬼貫は、まさしくリアルタイムの出来事を作品に、見事に取り入れているのである。しかも、「幻住庵」は、あくまでも「幻住庵」であり、芭蕉の門弟で膳所藩士曲水（曲翠）の伯父「幻住老人」が所有していたものを借りて、たった百六日過しただけの仮りの住居を、鬼貫は、さっさと「芭蕉がいほり」と命名してしまっているのであるから面白い。そして芭蕉が夏の暑さを凌ぎ、ホッと一息ついてへ先たのむ椎の木も有夏木立と詠んだ句をアレنجシして、秋で、たわわに実をつけている椎の木に対してへ我レに喰せ椎の木もあり夏木立と呼びかけ、それを、そのまま、斯道の先輩芭蕉への挨拶としているのである。芭蕉さんが涼んだ、その同じ椎の木の下で、私は、椎の実をいただく、というわけである。

ところが、である。芭蕉の「幻住庵記」を収めているアンソロジー『猿蓑』が公刊されたのは、元禄四年（一六九一）七月三日のことである。普通ならば、見ることはおろか、知ることでもできない内容なのである。そこで問題となるのがニュースソースである。後でもう一度触れようと思うが、芭蕉が鬼貫の『犬居士』を披見していた可能性は、すこぶる高い。公刊されていた書物であるし、自らの名前が出ている書物に関心を示すことは、今も昔も変らない物書きの習性でもあろう。その時、芭蕉

は、少なからずびっくりしたのではなからうか。自分の行動が、門弟でもない第三者で十七歳年少の鬼貫に筒抜けになってしまっていたのであるからである（冷静になって考えれば、ニュースソースには想到するであろうが、当初の驚きが、かなりのものであったことは間違いないであろう）。そのニュースソースであるが、鬼貫自身が『東海道旅日記』（「禁足之旅記」）の中で明かしている。旅程の最後、十月二日の条に、

之道、けふは隙にしてきたりぬといひけるを、またとらへて、歌仙、之道発句あり。誹諧略之。

と見えるのである。この「之道」こそが、ニュースソースにかかわる人物なのである。大坂の俳人で、はじめ来山門、元祿三年に芭蕉の門弟となった人物。鬼貫と来山は、親交があり、その門弟だった之道とも、前から交流があったのである。之道が、「幻住庵」に滞在中の芭蕉を訪ねていることは、「幻住庵」を訪れた人々の作品を列挙した芭蕉の「凡右日記」に、

麦の粉を土産す

一袋これや鳥羽田のことし麦 之道

と見えることによって明らかである。この後、之道は、「幻住庵」を出て義仲寺の草庵に入った芭蕉を訪ねるのであるが、その途中、大坂住の鬼貫のところに立寄っている。之道が元祿三年（一六九〇）に出版しているアン

ソロジー『あめ子』に、

中の秋十日あまり、之道、芭蕉翁をたづねて行ひ、後のなつかしきを、

橋よりも戻る心を瀬田の奥

鬼貫

と見えるところである。肉体は、瀬田の奥の芭蕉の庵にと歩を進めているが、せめて心だけは私のところに戻ってきてほしい、との『東海道旅日記』一卷と同じ発想の作品である。前書に見える「中の秋十日あまり」とは、元祿三年八月十日過ぎのことである。この折、鬼貫は、之道より、芭蕉の「幻住庵記」の内容（草稿段階のものであろうが）を聞かされたのであろう。それが『東海道旅日記』の、先に見た九月二十一日の条の記述を生み出すことになったと考えて間違いないと思われる。鬼貫は、芭蕉の動向を之道経由でキャッチし得たわけである。それでは、次に『東海道旅日記』の同じ九月二十一日の条に見えた、

石山のいしの形もや秋の月

の句に目を移すことにしよう。この句、之道編『あめ子』には、

石山の石の形や秋の月

鬼貫

との句形ででている。この句形ならば、一句の独立性において問題ない。石山寺の名石のフォルムを、月光下で賞美した作品ということになる。が、『東海道旅日記』

の句形の中七文字は、「形もや」なのである。そこで想起されるのが、芭蕉の『おくのほそ道』中の加賀（石川県）「那谷寺」の条である。次のように記されている。

奇石さまに、古松植ならべて、萱ぶきの小堂、
岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

芭蕉の一句の意味するところは、ここ那谷寺の「奇石」の白さは、あの石の白さで知られている近江の石山寺の石の白さよりも、もっと白いではなからうか、そして、その白い「奇石」に秋風が蕭々と吹いている、ということであろう。そして、鬼貫の念頭には、芭蕉の、石山の石の白さ、すなわち色彩に注目してのこの句があったので、それを意識して、色彩ではなく「形」に注目してみたのであろう。芭蕉の句に対する挑戦、あるいは挨拶であったのである。それを示しているのが、鬼貫句の中七文字の「いしの形もや」の「もや」なのである。色彩の白もいいが、「形」も趣がある、というわけである。芭蕉句があることによって、「もや」の謎が解けるのである。

ところが、である。元禄三年（一六九〇）の時点で、『おくのほそ道』は、まだ公刊されていないのである。しかも、その時点では、『おくのほそ道』以外に、一句を収載している俳書類は、皆無である。

この疑問に対する解決の緒を探る前に、『東海道旅日記』の中にある、『おくのほそ道』を意識して書かれていると思われるもう一箇所を提示してみることしたい。九月二十五日の条である。

池鯉鮒を過て、やはぎにつく。藪生たる所、かの長者のあとなどいひて、田の中に見ゆ。やとひたる馬士の、是によそへて望むほどに、耳ちかき世のふしをとりて、

上瑠璃より田の番は夜る斗

矢作の長者の娘浄瑠璃御前と牛若丸との恋物語をテーマとして的一条であり、一句の意味するところは、その恋物語を茶化しての、刈りとった稲の夜の番を頼んでも、浄瑠璃姫は、牛若丸との密会のため無理だろうな、ということになるうか（前掲拙著参照）。それはともかく、注目いただきたいのは、私が付した傍点部である。雇った馬士が、主人公（鬼貫）に、長者の娘浄瑠璃御前にこよせての俳句を求めたというのである。それに応えての一句が上瑠璃よというわけである。

このシチュエーション、どこかで見た記憶がおありになるのではなからうか。これまた、芭蕉の『おくのほそ道』なのである。そつくりのシチュエーションの一条がある。那須の「殺生石」の条である。

是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付

のおのこ、短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと、

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

黒羽の「館代」（留守居役の家老）の家より馬に乗って殺生石へ行く途中の主人公（「予」・芭蕉）の那須野でのエピソードである。ここにおいても、『東海道旅日記』と同様、馬士（「口付のおのこ」）が、主人公に一句を求めているのである。そこで、折から鳴いた時鳥（「ほとゝぎす」）をテーマに、△野を横にVの一句を与えたというのである。この一条の、先の『東海道旅日記』の九月二十五日の条への影響は、一読明らかである。

△野を横にVの一句は、芭蕉七部集の一つ『猿蓑』に収められているが、一句成立のシチュエーションは記されていないので（刊行も、『東海道旅日記』の一年後の元祿四年である）、これも、『おくのほそ道』以外の典拠は、考えられないのである。

ということで、鬼貫は、元祿三年（一六九〇）十月の『東海道旅日記』（「禁足之旅記」）執筆に当って、芭蕉の『おくのほそ道』の草稿段階での内容を、ある程度把握し得ていたということなのである。別の視点から言えば、元祿二年に実施された『おくのほそ道』の旅は、元祿三年十月頃までには、紀行文学としての形を整えて

いたということではあるまいか。

それでは、その原『おくのほそ道』の内容の一部、あるいは概容を鬼貫に伝えたのは、誰だったのであろうか。一番考えられるのは、元祿三年四月六日より七月二十三日までの間「幻住庵」に滞在していた芭蕉を訪ねた人物である之道であらう。先に見たように、之道は芭蕉の「幻住庵記」の内容を鬼貫に齎した人物であった。その折には、すでに原『おくのほそ道』が成立しており、之道は披見し得た、と考えるわけである。このように考えるならば、芭蕉の「幻住庵」滞在は、『おくのほそ道』執筆のため、とも推察し得るのである。そして、之道によって『おくのほそ道』の内容の一部、または概容が鬼貫に齎されたということではなかったらうか。

鬼貫は、之道以外にも、支考・惟然・路通・園女・舎羅、そして『東海道旅日記』にも登場している風雪等の芭蕉の門弟たちとの交流もあったので、これらの人々の中の誰から、との可能性も、もちろんあるのではある。

が、実は、それ以上に気になる人物が『東海道旅日記』には登場しているのである。『おくのほそ道』の清書者素龍である。『東海道旅日記』の九月二十八日の条に、

また素龍にとはれて、まりこのやどの初夜までに、
半歌仙、素龍発句あり。

俳諧略之。

と見えるのである。素龍については、芭蕉の門弟野坡の談話を書き留めた風律の『小ばなし』（宝暦年間成立）に、左のごとく記されている。

素龍は京の人にて、歌学は季吟の弟新玉津島正立の弟子なり。手跡は上代様なり。江戸に來りて客居す。或時、坡翁、深川の芭蕉庵へ行けるに、翁云ふ、素龍といふ人京より下り被申し由、聞及びたる人なり、逢度候間、聞合せ可給と申さる。夫より、あれこれきゝ合せたるに、旅宿に居られしを尋ね行て逢ふ。芭蕉庵、逢申度由被頼候間、深川の庵へ御同道申度よしひしに、芭蕉庵は此方にも聞及候へば、幸の事にて候間、御同道参可申由にて被参候。夫より三年程庵に居被申候。其時分、翁、此素龍の手を習ひ被申候。（中略）奥の細道、炭俵集は、素龍の筆なり。

坡師語

素龍が江戸に下ったのは、元禄五年（一六九二）冬のことである。右の『小ばなし』の記述が信憑性のあるものであるとすると、お互にその存在を認識しつつも、元禄五年の時点まで交流はなかったようである。となると、鬼貫が『東海道旅日記』執筆の段階においては、『おくのほそ道』の情報に素龍経由で鬼貫のもとに入る可能性は、なかったと見るべきであろう。やはり、之道の線が一番強いようである。

ただ、面白いことは、芭蕉が『おくのほそ道』の清書を、あえて『東海道旅日記』の登場人物である素龍に依頼していることである。書家としての評判が高かったことにもよるのであろうが、芭蕉が元禄三年（一六九〇）刊の『東海道旅日記』を披見していたとするならば（その可能性は、すこぶる高いと判定してよいであろう）、芭蕉の素龍起用には、鬼貫を意識しての別の思いが働いたことも考えられるのである。『東海道旅日記』は、発句（俳句）作品と、地の文とが、美しく均衡を保ち、交響し合っている。また、「禁足之旅記」として、「禁足」のデバイス（装置）を十分に生かしての文学化に成功している。そんな紀行文学が、芭蕉の『おくのほそ道』が完成する四年近く前に公刊されて、不特定多数の読者を獲得していたのである。鬼貫の『東海道旅日記』が芭蕉の『おくのほそ道』の影響を受けていることは、右に見た通りであるが、ひよっとしたら、芭蕉の『おくのほそ道』に、『東海道旅日記』が少なからぬ影響を与えていることも、考えられない話ではないのである。

『東海道旅日記』はそんな意味でも魅力溢れる紀行文学である。